

平成十六年三月 現代密教 第十七号 抜刷

曇寂の教主義について

小林靖典

# 曇寂の教主義について

小林 靖 典

## 一、はじめに

曇寂（一六七四～一七四二）は、江戸期に活躍した京都嵯峨五智山の学僧である。曇寂は『大日経』における教主義について本地加持会合説を主張し、弟子常明（二七〇二～一七八四）へと流れたその学脈は長谷に流れ、法住（二七二三～一八〇〇）に至って本地加持会合説が大成された。もう一人の弟子である寂巖（二七〇二～一七七二）は梵学に秀で、その学脈は慈雲尊者飲光（一七一八～一八〇四）に至って『梵学津梁』一千巻に結実したとされている。また洛東智積院においては、第三十三世能化隆瑜（一七七三～一八五〇）の教学に多大な影響を与え、『拾要記』の名が付されている隆瑜の多くの著作は、曇寂の『私記』類を元に著されているとされている。<sup>1)</sup>

このように曇寂は、江戸期における真言教学に大きな足跡を残し、そして多くの影響を与えたのであるが、必ずしもその教学について研究が進められ、理解が深められているとは言いがたい。<sup>2)</sup>そこで本稿では、曇寂の主張さ

れた本地加持会合説について、その主著ともいえる『大日経教主義』一卷、『大日経住心品疏私記』二十卷、『金剛頂大教主経私記』十九卷によって少しく考察し、曇寂の教学を理解する端緒としたい。

## 二、道空の教主義

権田雷斧氏の『大日経疏文前要義』<sup>(3)</sup>によれば、曇寂の本地加持会合説は、五智山如幻道空（一六六六―一七五）の立てた説に対して、別途の義により独自の説を立てたとされる。すなわち、如幻道空は曇寂との親交深く、それにより曇寂の住する五智山の辺りに草庵を結び、共に地藏院流を受け、教学においてもその趣を同じくしたとされる。しかし、道空が『教主義』<sup>(4)</sup>なる著作を著すに至って、曇寂は道空の説を認めず、大いに議論を交わしたが、ついに両者の意見は一致することがなく、その後三年の間、たとえ同席したとしても、両者とも決して口を利くことがなかったと伝えられている。

そこで、道空の主張した教主義とは、いかなるものであったかであるが、その著書『教主義』によれば、金剛界は秘密心殿にして、四種法身ともに斯の道を陳べたる自証の法身にして、本加を加えず。大悲胎藏は加持の説法にして本地に非ず。故に『阿鑊義』に曰く、金剛界は自受用身の説法、胎藏界は他受用身の説法なり。  
 （『権田雷斧著作集』第九卷、『大日経疏文前要義』一二二頁）

とあり、これによると、金剛界（『金剛頂経』）は自証法身（自受用身）による説法であり、そこには本地身と加持身というものを考えるべきではないとする。これに対して大悲胎藏法（『大日経』）は、自性身等の四種法身に理解すべきではなく、『大日経疏』に説かれている、本地身と加持身にて理解すべきであり、その二身においては、本地身の位には言説が無く、本地身が教主となって説法するのではなく、言説を有する他受用身たる加持

身が教主となつて説法するものであるとし、それは、興教大師覺鑊の『阿鑊義』<sup>(5)</sup>に説かれている通りであるとするのである。さらに道空は、

金胎の説法は、金胎両部一雙なれども、伝訳の祖師に至つては浅深無きに非ず。その所以は金剛智三蔵は一多両法界を全うし、両部並びに承けて密学の正嫡なり。吾が大師の相承し給う所にして、正しく極位説法を伝いしなり。無畏三蔵は偏に一法界の義を相承する故に、但だ加持の説法のみを談ず。一行阿闍梨、これを承けて本地無説法を談ず。これ付法の祖師に撰せざる所以なり。

〔権田雷斧著作集〕第九卷、『大日経疏文前要義』一二二頁

として、『金剛頂経』と『大日経』とは両部不二なる関係であるが、それを伝えてきた金剛智と善無畏・一行とでは、その内実に大きな違いがあるとす。それは、金剛智三蔵は一法界と多法界<sup>(6)</sup>の両義を伝え、これは弘法大師空海における極位説法、すなわち法身説法へと至るものとなつているのであるが、これに対して『大日経』を訳し『大日経疏』を編んだ善無畏・一行は、ただ一法界のみを伝えるだけであり、それ故『大日経』では、本地身の位に言説無く、説法することがなく、ただ加持身のみが教主となつて説法することができると、道空はいうのである。それは、善無畏と一行が付法の祖師に列せられていないことによつて、明らかであると主張するのである。

このような立場は、空海の提唱された法身説法の説と、善無畏・一行の『大日経疏』の本地身・加持身からなる仏身とを会通しようとしてきたこれまでの先師たちとは一線を画し、純粹に『大日経疏』を編んだ善無畏・一行の真意を探ろうとするもので、江戸期における時代性を色濃く反映したものとなつており、新たに展開する真言教義解釈の一翼を担うものといえるであらう。

## 三、曇寂の本地加持会合説

## 一、曇寂の論述態度

このような道空の説を論駁するために、曇寂は『大日經教主義』を著したとされるのであるが、その中で教主義を論ずる曇寂の態度は、

如上に挙ぐる所を明かすに、古徳の説同じからず。皆疏主の意を得ざるは何ん。各の皆四種身義に狹帯して、經疏に明かす所の二身の義を解せず。是れを以てその実を得ざるなり。学密の者、若し疏主の意を得んと欲せば、すなわち、先ず四種身説及び諸師を一掃すべし云々。當に須らく空心にして經疏を読むべし。爾らざれば絶にして疏主の意を得ること無くるのみ。

(大正蔵七七卷、八五五頁中段)

というものであり、これによるならば、空海以後、多くの諸師先徳が種々教主について論じてきたのであるが、みな『大日經疏』を編んだ善無畏・一行の真意を得ていないとする。何故なら、『金剛頂經』系に由来する自性・受用・變化・等流の四種身説に拘泥した上で、『大日經疏』に説かれる本地身と加持身の二身を理解し、解釈しようとしているからであるという。そこで曇寂は『大日經疏』を編んだ善無畏・一行の真意を理解しようとすれば、『金剛頂經』系による四種身説や諸師先徳の説に執らわれることなく、純粹に『大日經疏』を読むべきであると主張するのが、教主義を論ずるときの曇寂の立場であり、このような論述態度は、先の道空のそれと一致するものと思われ、そこには、江戸期の開放的な学究態度がうかがえるのである。

## 二、『大日經』の教主

そこで、曇寂の主張する『大日經疏』の真意とは、どのようなものであるかといえ、最も簡潔に述べているのは、その著書『大日經教主義』に記されている次のような文であろう。すなわち、

疏主の意、応に不二加持身を以て教主と為すと云うべし。不二とは即ち不思議二諦なり。謂く本地を全うし外に流れて、群機に対して称して加持と為す。本地を離れて別に加持あるに非ざるなり。

(大正藏七七卷、八五五頁下段)

\*以下、傍点はすべて筆者による。

と記し、これによれば、曇寂は『大日經疏』を編んだ善無畏・一行の真意とは、不二加持身を教主とするものであるとし、この不二加持身とは、本地を離れざる加持、本地加持不二なる上の加持身、不二而二なる身であると主張するものである。

さらに曇寂は、

前の自証説とは、自受法楽唯仏与仏の境界なるが故に、衆生此れを以て益を蒙ること能わず。是れを以て加持方便して、而して自証の如く妙法を演説したもう。即ち、いわゆる十万頌の本、是れなり。而るに古義は自証説法と云い、新義は加持門の説を談じ、各の一義に執せり。いま二説を合して終に相い離れず。謂つべし、円満せりと。此の二説は同にして異、異にして同なり。何となれば、若し能化に約さば、加持説の時、即ち自証説なり。越三時如來之日加持なるが故に、累ママにして同と云う。若し時間に約さば、本地を全うして加持説を作す、故に同にして異と云うなり。

(『大日經教主義』大正藏七七卷、八五六頁下段)

と記して、自証の位には利他が無く、それ故、加持方便して「自証の如く(本地身に即して)妙法を説いた」の

が『大日經』であるとし、この自証の如く法を説くことを、いわゆる古義方では本地身說法といい、新義方では加持身說法といったのであるとした。すなわち曇寂は、能化としての仏の位から見ならば、古義方という自証説（本地身説）となるのであり、逆に時間（所化である衆生）の位から見ならば、新義方という加持身説となるというのである。そして『大日經』の教主を曇寂は、本地加持不二なる上の加持身としたのである。

また、曇寂は『大日經住心品疏私記』の中において、

問う、若し爾らば、疏主の意に依るに、今此の經は、是れ法身の説、是れ他受用身説と為すや。

答う、如来加持受用身の説なり。然るに此の加持受用身は、一往、常教の他受用に似たり、而して其の実は同じに非ざるなり。故に疏の処処の釈に此の旨顯われたり。故に本地法身説の義、多く理に順ずるなり。何となれば、常教の応身は迂回して機に順じて法を説く。今教主は迂回すること無く直ちに本地を説く。

（大正藏六〇卷、三九七頁上中段）

と、問答形式によって明らかしているように、善無畏・一行は『大日經疏』に説かれる「如来加持受用身」が教主であり説法するものであるとしたはずであると、曇寂は理解した。その上でこの教主の性格は、顕教でいう所の他受用身のように見えるが、実際はそうではなく、法身が説法するのと同様に、機根に隨うことなく、直接、本地法身の境地を如来加持受用身が説くことができると考えたのである。

### 三、頼諭の教主義との相違

このような曇寂の教主義は、一見すると頼諭の提唱した自性身上の加持身説と同様のものであるかのように見えるが、その実は別の立場を採っているのである。このような曇寂独自の教主観は、次に示す『大日經疏』の文

に對する読み方に対して、顯著に看取することができる。その『大日經疏』の文とは、

經云薄伽梵住如来加持者。薄伽梵即毘盧遮那本地法身。次云如来。是仏加持身。其所住处。名仏受用身。即以此身。為仏加持住处。

(大正藏三九卷、五八〇頁上段)

というものであり、この文をめぐっては、古来、諸師先徳によつてさまざまな解釈、読み方がなされてきたのである。

そこで、この文に對する曇寂の読み方を示せば以下のようなものであり、その特徴をみるために、古義の本地身説方と新義の加持身説方の読み方をあわせて掲げておくことにする。

#### 【曇寂の読み方】

〔『經』に云わく、「薄伽梵、如来加持に住す」とは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり〕。次に如来と云うは、是れ仏本地身加持身なり、其加持身の所住の処にして仏本地身受用身と名づく。即ち此の身受用身を以て、仏本地身加持住处と為す。如来心王加持身は諸仏の住にして、而も其受用身の中に住したもう。

(『大日經住心品疏私記』大正藏六〇卷、三九七頁中段)

\*〔 〕の中の文章は、筆者が補つたもの。



a、本地身説方の読み方

『経』に云わく、「薄伽梵、如来加持に住す」とは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如来と云うは、是れ仏加持身なり、其れ所住の処にして、仏受用身と名づく。即ち此の身を以て仏加持住処と為す。

b、加持身説方の読み方<sup>(8)</sup>

『経』に云わく、「薄伽梵、如来加持に住す」とは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如来と云うは、是れ仏加持身の其の所住の処なり、仏受用身と名づくなり。即ち此の身を以て仏加持住処と為す。

このように、『大日経疏』の文に対する読み方は、相違しているのであるが、そこで本地身説方の読み方と加持身説方の読み方について、一瞥しておくことにする。

まず、本地身説方の読み方では、**薄伽梵** **教主** は本地法身であり、この本地法身が、**仏加持身** **仏受用身** **仏加持住処** に住して説法するというのである。

これに対して加持身説方の読み方では、「次に如来と云うは、是れ**仏加持身の其の所住の処なり**」と読むこと  
 によって、**仏受用身** **仏加持住処** に**仏加持身**が住するという意味になり、これにより、**薄伽梵** **教主** の句の

中に本地身と加持身とが含まれ、この本地身には言説が無いので、言説を有する加持身が正しく教主となって説法するといふのである。

この本地身説方と加持身説方の二様の読み方に対して、別に曇寂は先に示したように読むといふのである。このことについては、

仏とは題中の「成仏」の仏、即ち本地身にして、仏加持身とは依主釈なり。「其」とは加持身を指すなり。「仏受用身」とは、亦た是れ依主釈なり。——中略——及び「仏加持住処」とは、仏とは亦た本地身、亦た依主釈なり。——中略——『疏』に「仏加持身」「仏受用身」「仏加持住処」と云う、三箇の「仏」の字は、無相法身と無二無別なることを知らしめんが為なり。

（『大日経住心品疏私記』大正藏六〇卷、三九七頁下段—三九八頁上段）  
と解釈しているのである。すなわち曇寂は、『大日経疏』に説かれている仏加持身・仏受用身・仏加持住処の三項の「仏」の文字を、すべて薄伽梵たる本地法身として理解し、この仏加持身・仏受用身・仏加持住処の三項を依主釈として読むことによつて、この三項は順に本地身の加持身・本地身の受用身・本地身の加持住処となり、本地法身と加持身・受用身・加持住処とは無二無別であるとするのである。そしてその上で、加持身の住する住処を「受用身<sup>〓</sup>加持住処」であるとするのである。すなわち、この『大日経疏』の文は、本地身と無二無別なる加持身が本地身と無二無別なる受用身に住して説法するとし、曇寂は、この本地身と無二無別なる加持身を「不二加持身」とか「如来加持受用身」と名づけて、この仏身を正しく『大日経』の教主であるとし、これを善無畏・一行の真意であるとしたのである。

さらにまた、曇寂は、

「薄伽梵」とは是れ本地身なり。本地無言なるが故に加持身を現じて説法す。是れを「如来」と云う。是れを以て同にして異なり、異にして同なり。本迹に異なり無し。不思議一なり。今且く異に約して教主を談ずるが故に、「如来是仏加持身」と云う。既に如来の号を以て、本地身に簡異す。云何んが、「薄伽梵」の句に加持身を含むと云うや。『疏』に違ふと見るべし。

〔大日経教主義〕大正蔵七七卷八五上段  
 と述べており、頼瑜が「薄伽梵」の句に加持身を含めて、自性身上の加持身を構築していることを、明らかに批判していることが理解することができ、このようなことによつて、頼瑜の加持身説や古義方の本地身説とは一線を画したものであるということがいえるのである。

#### 四、『金剛頂経』の教主

次に、曇寂の『金剛頂経』に対する教主観について見ていくことにする。曇寂は『大日経教主義』の中に、今且く異に約して教主を談ずるが故に、「如来是仏加持身」と云う。既に如来の号を以て、本地身に簡異す。云何んが、薄伽梵の句に加持身を含むと云うや。『疏』に違ふと見るべし。また宗家は『疏』の加持説の義を簡いて、金剛頂自受法楽の説に依りて、法身説法の義を談ず。自受法楽とは是れ自証の境界にして、永く加持の相を絶せり。若し本地の句の中に加持の義を含むと云わば、大いに宗家の本意に違ふなり。委しくは『大日開題』及び『二教論』等の釈を解して、迷雾自発するのみ。

〔大日経教主義〕大正蔵七七卷八五上(中段)  
 と述べ、『大日経』は本地身と加持身との無二無別にして、同にして異、異にして同なのであるが、『大日経疏』を編じた善無畏・一行は、「同にして異」の立場によつて教主を談じているので、本地身ではなく、言説のある

加持身が『大日経』の教主となつて説法すると、曇寂は理解するのであるが、そこで、『金剛頂経』における教主を、曇寂はどのように理解しているのかというと、宗家、すなわち空海が提唱した法身説法の説は、『金剛頂経』の自受法楽の説によつて成立しているのであり、この自受法楽は自証位の境界（『大日経疏』にいう本地身の境界）であり、そこには加持身は存在し得ないのである。それ故、頼瑜の主張するような、本地の句である薄伽梵の句に加持身を含めて理解することは、空海の法身説法の説が本来意図していることと相違してしまふことになる」と批判するのである。

また曇寂は、『金剛頂大教王経私記』の中において、

「薄伽梵金剛界遍照如来」とは教主を明かすなり。『大日経疏』に教主を釈して云く、「薄伽梵とは即ち毘盧遮那本地法身なり」と文り。本地法身とは即ち自性法身なり。是れは此の経の教主なり。——中略——「遍照」とは即ち毘盧遮那の翻名なるが故に。義は心王毘盧遮那と同なり。「心王毘盧遮那」とは即ち本地身にして此の経の教主なり。

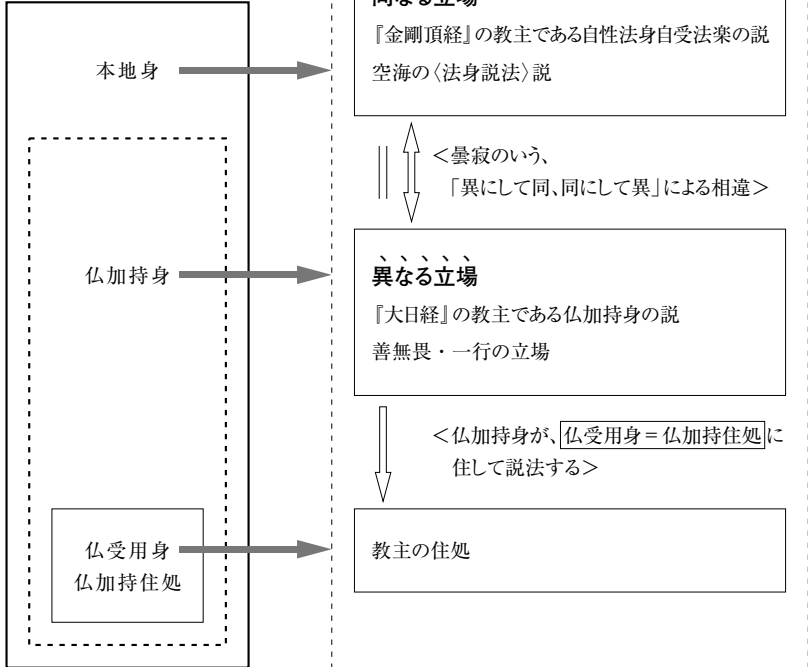
（大正藏六一卷、一四〇頁下段〜一四二頁上段）

と述べているように、曇寂は、『金剛頂経』の教主は、『大日経疏』でいうところの本地法身である自性法身が教主であると明言しているのである。すなわち、「異にして同」なる立場で『金剛頂経』の教主を論じているのである。

以上のことによつて、『金剛頂経』と『大日経』の教主に対する曇寂の解釈を簡略に図示すれば、次のようになるであらう。

《『大日經疏』所説の三身に対する曇寂の理解》

《『大日經疏』所説の三身》



この図で明らかかなように、先の「曇寂の論述態度」のところにおいても指摘した通り、空海の〈法身説法〉の説と『大日經疏』とを会通することを曇寂が否定し、『大日經疏』を編じた善無畏と一行の意図するところが純粹に理解しようとする態度を改めて看取することができるのである。

四、事相法流との関係

最後に、曇寂の教主義と事相法流との関係について、言及しておきたい。それは、『大日經疏』第九卷の三昧耶の文に対する解釈に、それを見ることができるのである。その『大日經疏』第九卷の三三昧耶の文とは、

復た次に真言行者は、初めの三

昧耶を以ての故に、如来秘密の身口意平等の身と同じきことを得。第二の三昧耶を以ての故に、如来加持法界宮尊特の身と同じきことを得。第三の三昧耶を以て故に、此の身土をして、皆な金剛の如くならしめ、無量の持金剛衆のために、而も自ら圍繞せらる。

(大正蔵三九卷、六七五頁下段)

というものであり、曇寂はこの三三昧耶の文を「加持流現の説会の相に約す」ものとして、『大日経教主義』の中で、次のように解釈している。

当段の『疏』に総じて三身有り、一に本地身、二に加持身、三に受用身なり。第九に三三昧耶を積する中に「前出」と文り。此の積は、即ち今の三種の身を明かすなり。「初めの三昧耶」は本地身を明かす。即ち經の「薄伽梵」の句に当たるなり。——中略——「第二の三昧耶」は加持身及び其の住処を明かすなり。是れ經の「住如来加持広大金剛法界宮」に当たるなり。——中略——「第三の三昧耶」は其の眷属を明かす。即ち「一切持金剛者皆悉集会」に当たるなり。夫れ此の經の宗とする所、正に三三昧耶に在り。

(大正蔵七七卷、八五五頁中下段)

この三三昧耶の文について、このように曇寂が言及し解釈した意義を、権田雷斧氏は、三重の印可と同調させてその意義を次のように認めている。すなわち権田は、初めの三昧耶である本地身を第三重の一印一明に、第二の三昧耶である加持身を第二重の一印二明に、そして第三の三昧耶である受用身を初重の二印二明に相当するとし、これを地藏院流の正統の所伝<sup>(10)</sup>であるとした。これは、地藏院流を汲む頼瑜の中性院流を、そしてまた、頼瑜の主張した自性身上の加持身説と理性院流・地藏院流の事相法流との関係を強く示唆するものである。

しかしここでは、曇寂の本地加持不二なる上の加持身説と事相法流との関係については、指摘するだけにとどめ、その考察は別の機会に譲ることにしたい。

## 五、まとめにかえて

以上、曇寂の教主義について概観してきた。そしてそれは、「曇寂の論述態度」の所において示したように、『大日経疏』を編じた善無畏・一行の意図を純粹に汲みとろうというものであり、その教主義は、古義方の本地身説や新義方の加持身説、どちらか一方にとらわれることなく、また、空海の《法身説法》説とも敢えて会通しないというものであった。ただ今回は、その概略を述べたに過ぎず、詳細な考察をするに至っていないので、今後は曇寂の教学についてさらに研究を深める必要を感じている。

また、この曇寂のような、真言教学において新たな主張が可能になった背景には、江戸期という時代性が関係していたのではないかと思うのである。それは、冒頭に示した道空との関係はもちろんのことではあるが、同時代の他の学匠との比較、さらには、曇寂の学脈を継ぎ、本地加持会合説を大成したとされる法住との相違点を考察することによっても、曇寂の教学や江戸期という時代が、真言教学にとって新たに評価されると考えるものがある。

註

(1) 隆瑜能化の教学への影響は、北尾隆心「曇寂撰」二期大要略出私記」について」(『智山学報』第三七輯、一九八八年)の註(一)を参照されたい。

(2) 曇寂に関する論攷は、権田雷斧「大日経疏文前要義」(『権田雷斧著作集』第九卷)、林田光禪「教主義合纂」、林田光禪「道空と曇寂」(『密宗学報』七十九号、一九二〇年)、

坂野栄範「智山教学史上に於ける曇寂の教学に就いて」(『智山学報』第七・八輯、一九三五年)、布施正夫「真言教理史上の曇寂について」(『智山学報』第一五輯、一九六六年)、北尾隆心「曇寂撰」二期大要略出私記」について」(『智山学報』第三七輯、一九八八年)、北尾隆心「曇寂撰」二期大要略出私記」について」(『密教学』第二九号、一九九三年)など、わずかであり、曇寂の多数の著作に比

曇寂の教主義について

- べても少ない。
- (3) 『大日經疏文前要義』二二頁(『権田雷斧著作集』第九卷)
- (4) 『智山学匠目録』(四〇頁)の道空の項によれば、「『教主義』(写)一卷」の名を見ることができ、その備考には「此本未見」とあることにより、その所在は不明である。ただ、道空の『教主義』の一部が、権田雷斧の『大日經疏文前要義』に所載されている。
- (5) 覚鑿撰『**た**界秘事』の「金剛界の仏は自受用身にして、切利天上帝釈宮に住して之れを説く。胎藏界の仏は他受用身にして、色究竟天魔醜首羅智處城に住して之れを説く」(『興教大師全集』二三四頁)の取意。
- (6) 一法界と多法界については、那須政隆「有無相及び一多法界」(『智山学報』第三輯)を参照されたい。
- (7) 『大正新修大藏經』には「累」とあるが、恐らく「異」の誤りと思われる。
- (8) 頼瑜撰『大日經疏指心鈔』の「文点」に云く、次ぎに如来と云うは、仏加持身の其の所住の處なり。仏受用身と名づくるなり」(大正藏五九卷五九四下)に基づく。
- (9) 曇寂撰『大日經教主義』(大正藏七七卷八五五頁中段)に、「大日經疏」三三昧耶の文に対する細注として「加持流現の説会の相に約す」の文言がある。
- (10) 『権田雷斧著作集』第九卷、「大日經疏文前要義」二〇頁。事相法流との関係 頼瑜の自性身上的の加持身説と事相法流との関係については、藤田隆乘氏の「頼瑜の四重秘釈につ
- いて」(『智山学報』第五十輯、平成十三年三月)を参照されたい。
- (キーワード) 道空、頼瑜、本地身説、加持身説